

157217

二〇一五年度

国語

《注意》

- 一、問題は、一から十七ページにあります。始まりのチャイムが鳴ったら必ず確認してください。
- 二、問題を解く前に、解答用紙に受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- 三、答は、すべて解答用紙に書いてください。句読点や記号などは字数にふくめます。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「とにかくにも、」彼はなお床の上で考えた。「ふられた虎一役は、うまくやらなければならない。獣にふんすることが、何も恥じょくというわけではない。獣でも鳥でも、うまくやりさえすれば立派な役者なのだ。そして何といっても、虎をやる役者は、日本中におれしかないのだ。そうだ。一つ虎をうまくやって見物をわっといわしてやろう。そしてほかの役者どもをけとばしてやろう。今のおれが生きて行くには、そうするよりほかはないのだ」

彼は急いで起き上ると、階下にいる妻を呼んで、着物を着かえた。そしてもう晴れ晴れした顔つきをしながら、階下へ下りて行った。その長火鉢のかたわらには、黄色いふきんがかけてある、彼のおそい朝の食台が待っていた。彼は急いでようじを使うと、そそくさとその朝飯とも昼飯ともつかぬ物に向かった。

えん側には息子の亘が、ひなたぼっこをしながら、古い演芸画報のページを、見るともなくひっくり返していた。その口絵の中には、ごくまれにしかのらぬ、彼の小さい写真姿があるにちがいなかった。お情けでたまにのせてもらう写真。彼は息子に対して、いつもながら恥らいを感じた。この息子の目に、役者としての自分がどのくらいに映るだろう。そしてそれが父としての自分と、どれだけの抵触を引き起こすだろう。――彼はばく然とそんな事を考えて、はしを運んでいる時に、亘は不意に声をかけた。

「お父さん。今日は稽古がお休みなの」

「ああ立ち稽古までお父さんは休みだ」

こういいながら彼は、覚えなければならぬせりふが一言もない虎の役を、改めて苦苦しく思い起こした。彼は実際稽古場へは出て、今度は他人とせりふを合わせる必要もなかった。要するに稽古というものは、彼にはいかに虎らしく跳躍すべきかを、一人考えればそれでよかった。

がしかし虎というものは、一体どんな飛びはね方をするのだろう。彼は絵に描いた虎を見た。旧劇のある物に出る虎も見たが、実物の虎は、ただそれらを通して、ばく然想像しているに過ぎなかった。いざ自分が演ずるとなると、いかに動物役者の自分にも、まるで特ちょうがわからなかった。いずれ猫属びょうぞくに入っている獣だから、勢い立った大きな猫と思えば大差はなかるうが、もし旧劇の猫騷そう動どうなぞに出る、猫のしぐさ以上に一步も出ないで、口の悪い劇評家なぞから、深井の虎は文字通りに、虎を描いて猫に類するなぞといわれてはしゃくだ。――彼はまたそんな事を考え続けた。

息子の亘は父がそんな事を思いなやんでいるとは知らず、親におもねる子供の技巧ことうの、おずおずするようなあまえた口調で、なおも問いを進めて行った。

「それじゃどこへ行くご用はないの」

「うん。まあないな。――だが何だって、そんな事を聞くんだ」

「ぼくね。お父さんがひまなら、今日上野へ連れてってもらいたいんだよ。お天気がいいんだからさ。ね。連れてつとくれよ」

「上野のどこへゆくんだ。あんな所へ行たって、少しもおもしろくはないじゃないか。子供に絵の展覧会はわからないし。――」

「だってぼく動物園へ入って見たいんだよ。去年からまだ一度も行かないんだもの」

「動物園？」

問四

思わず反問した彼は、頭の中でひらひらと思いうかぶ事があった。彼はこの子供の言葉を、一種（注2）の啓示けいしとして感謝していいか、一種の皮肉として苦笑していいか、どっちに取るべきかに迷ったが、たとえ子供を通して、神様から笑われているにしても、この機会を利用して、虎の実態を研究しておくのが、昨今の急務だと彼の職業が

教えた。

「動物園へカバが来てるんだからさ。ね。連れてつておくれよ」

「そうだな。それじゃたまには亘坊ぎやうぼうの相手になって、カバでも虎でも見て来ようか」

（中略）

上野の秋は木木も色づいて、広く白い散歩道には、人の流れが所所に日がさうかして動いていた。屋内にばかりいなれた深井は、青空の下でのおのずから気が晴れ晴れした。彼はまっすぐに動物園へ向かった。

園内に入ると、亘は喜んでかけ出そうとした。深井はそれを引き留めて、

「じゃお父さんは虎を見ているから、お前はすっかり見て回ったら帰っておいで」といいわたした。亘は父がなぜそう虎に興味を持つかとせんさくする余ゆうもなく、勇み立って父のもとからの解放を喜んだ。彼はもう走って行って、サルのおりの前にいる多勢の子供の中にまぎれこんでしまった。

問五

父もまた子からの解放を喜んだ。そして一人ゆっくり歩を運んで、ずっと前に来た時の記おくをたどりつつ、猛獣もうじゆうのおりを探し回った。目ざす虎のいる所はすぐにわかった。

（注3）ほうにけん

彼はみょうな心持でおりの前へ立った。方二間ほうにけんほどの鉄のおりの中には、彼の求むる虎そのものが、ものうげに前足をそろえて、うずくまっていた。そのうすよごれた毛並みと、どんよりくもった日のような眼光が、まず彼の目に入った時、彼はちょっとした落たんを感じた。あまりに今まで想像していた、猛獣の威勢いせいとちがったからである。けれどもじっと見つめている間に、彼の心はだんだん虎に同情して来た。一種問六のあわれみとともに、

みょうな愛情さえも生じて来た。このほがらかな秋の日を、うすら寒くおりの中にとざされて、あらゆる野性の活力をうばわれ、ただどんよりとうずくまって、人人の見るがままに動きもせぬ獣、その獣こそは自分の境ぐうにも似ているとさえ感じた。しかしどこが似ているのか、彼自身にもわからなかった。

彼はばく然とそんな感じがいに打たれて自分がこの虎にふんするのを忘れ、虎の肢態しだいを研究するのを忘れてじっとおりの前に立っていた。

虎も動かなかった。彼も動かなかった。この不思議な対照をなす獣と人とは、ぼんやりたがいに見合ったまま、じっといつまでも動かなかった。しまいには深井は、虎と同じ心持を持ち虎と同じ事を考えているように感じた。とつ然虎は顔をみょうにゆがめた。と思うとそのとたんに、それだけあざやかな銀色のひげを植えた口を開いて、大きな獣のあくびをした。開いた口の中は鮮紅色せんこうしきで、ぼたんというよりはバラの開いたようだった。がそれも一分間とたたずに、虎はまた元のような静けさに帰った。

ふとわれに帰った深井は、危うく忘れかけた自分の目的を、再び心によみがえらせた。問七けれども眼前の虎は、彼にただ一度のあくびを見学させただけで、あとは林のように動かなかった。それでも彼は満足した。これだけ虎の気持になればあとは、自分で勝手にはね狂くるえるように感じた。

「そうだ。一つ思い切って虎になってやるぞ。おれには色男の気持なぞよりも、もっと切実に虎の気持がわかるのだ」こう彼は心にさげんだ。

やがて彼はそこへもどって来た息子の手をひいて、前よりももっと欣然せきんとしながら、動物園の門を出た。――

翌日彼はふとJ新聞の演芸一せきわ話といううわ書きのいらんを見た。するとそこにはれいれいしく、「例の動物役者で売った深井八輔すけは、このごろではすっかり人間ばなれがしてしまって、昼飯はにやごにやごいいながらあわび貝で食い、給金はチンチン後足で立ちながら、もらうというこり方だが、いよいよ今度の歌舞伎座かぶぎざでも役もあろうに虎一役で大収まりに収まり、動物園に通って熱心に研究中。」と出ていた。それは昨日会った例の劇評家が、筆にまかせて書いた物に相違ちがひなかった。

問八彼はそれを読んだ時、ちょっと一種の憤激ふんに近いものを心に起こした。がしかしそれはすぐ消えて、あとには

苦笑となり、次いで晴れやかな微笑びへ推移した。

「なあにこれがおれの人気なのだ」

そう思うと彼はさらに『虎』一役を成功させる必要を感じた。彼はもうたばこを吸いながらも、飯を食いながらも、ねどこの中にいながらも、ひたすら虎の動作のみを考えていた。

その中にいよいよ初日は来た。そして丁数は進んで彼が虎となって現わるべき三幕目となった。彼は笑い顔一つせずに、虎のぬいぐるみぬいぐるみを着て、知らせの柝つきとともに球江邸きうけいの露台上に横たわった。

幕は開いた。まだだれも登場しなかった。ただものうげにねていた虎が、ようやく永い日のねむりから覚めたように、ちょっと身を動かして一声二声「ううっ」とうなった。そのとたんに大向こうから、「深井、深井！」と呼ぶ声が五つ六つかかった。深井は内心すくなくらず得意だった。

問九つづいて由井が登場した。川原が登場したが、そのたびににかかる大向こうかけ声は、深井のそれにおととも勝らなかった。深井は「それ見ろ」と思った。そして内心ますます得意だった。

劇は進行した。彼は由井と川原との会話を聞きながら、ひたすら自分が跳躍すべき機を待っている。劇は高潮に達した。そしていよいよ彼の活躍すべきキッカケとなった。

彼はまず猫とも虎ともつかぬ獣の伸びを一回した。それからおもむろに一、二度うなった。そして球江のからかうに連れて、猛然とその胸を目がけておどりかかった。つないであるくさがぴんときん張するほどに、勢いこんではね狂った。

観客はわき立った。「深井、深井！」と呼ぶ声がずい所に起こった。彼はぬいぐるみを通して、それらのかっさいを聞きながら、ほとんどわれを忘れて跳躍した。もう不平もなかった。憤激もなかった。ゆううつもなかった。恥じょくもなかった。ただ彼の忘我の心の中には、いいような不快感のみが存在した。

彼のなおもも猛然たる跳躍の中に幕は閉じた。見物のかっさいはまだ鳴りひびいていた。彼はすっかり満えつした。そしてようようとしてぬいぐるみのまま、舞台を引き上げて来た。するとその暗い書割のかけで、不意に彼の片手へすがりつく者があった。彼はちょっとびっくりして、ぬいぐるみのぞき穴から、そっちを見やった。そこには彼の息子の亘が、

「お父さん！」といって立っていた。

深井は得意の絶頂から、たちまちにして恥のどん底に放りこまれた。彼は彼の息子の前で、ぬいぐるみの中の顔を年がいもなく真っ赤にしたが、再び見おろした息子の目には、このふがない父の役を、非難するような何物もなかった。かえって父の苦しい境ぐうに同情する、泣きたいような表情が現れていた。

「亘！」深井は思わずそういって、息子の身体をひしと引き寄せた。なみだがぬいぐるみの虎斑を伝うてぼろぼろと落ちた。……

問十一 こうして虎と人間の子とは、暗い背景のかけでしばし泣き合った。

(久米正雄『虎』)

〈注1〉くいちがうこと。

〈注2〉神が真理を人間にあらわし示すこと。

〈注3〉二間四方のこと。一間は約一・八二メートル。

〈注4〉喜んで行う様子。

〈注5〉しばいで合図としてたたくひょうし木。

問一 Ⅱ ア・イと同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

ア そそくさと

- 1 友人の結こん式のスピーチをたのまれたAさんは、とても喜んでそそくさと原こうを書きはじめた
- 2 クラブの先ばいにあこがれているBさんは、先ばいのたん生日のためにそそくさとマフラーを編んだ
- 3 友人から借りた本を返していないC君は、町で友人の姿を見かけてそそくさとその場を立ち去った
- 4 ねぼうしてバスに乗りおくれってしまったD君は、必死になって駅への道をそそくさと走っていった

イ ようようとして

- 1 A先生はとつ然の大地しんにも動じないで、ようようとして生徒のゆう導にあたった
- 2 金メダルをかく得したB選手は、ようようとして表しょう台のまん中にのぼっていった
- 3 長年つとめた会社を定年退職したCさんは、ようようとして静かな生活を楽しんだ
- 4 Dさんは毎月こつこつとおこづかいをためて、ようようとして自転車を手に入れた

問二 ――部「そしてもう晴れ晴れした顔つきをしながら、階下へ下りて行った」ときの「深井」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 生活のためには役者としてのほこりを捨て、たとえ動物の役であろうとやらないわけにはいかないと、気持をきりかえた
- 2 演劇の実力者である自分がたかが動物の役であれこれなやむことはないと思いいたり、世間の悪い評判を頭から取りはらった
- 3 虎などというやりがいのない役を自分におしつけた演劇仲間たちの悪意を感じ、なんとしても彼らをやりこめようと奮起した
- 4 虎を演じることに恥^はずかしさを感じていたが、虎を演じられるのは自分しかないと考えることによって自信を取りもどした

問三 ――部「彼は息子に対して、いつもながら恥^はらいを感じた」とありますが、「いつもながら」感じる「恥^はらい」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 父としても役者としても自分をしたってくれている息子に対してどちらにおいても優れていたいのに、役者としてはたいした役が回ってこなくて息子にいいところを見せられないこと
- 2 息子は規則正しい生活をして朝早くから起きているのに、父として息子を教育すべき自分がねぼうをして息子の前でおそい朝食をとることになり、息子にしめしがつかなくなっていること
- 3 雑誌に自分の写真をのせてもらうことがごくまれにしかなく、しかもそれがお情けであるのに加え、写真自体がいかにも小さくて、自分の活躍がじゅうぶんに息子に伝わらないこと
- 4 自分が役者としていつまでたっても一人前になれないことで息子が自分をさげすんでいるのをびん感に

さとしてはいるが、それでも威厳ある父親を演じなければならないこと

問四 ――部「頭の中でひらひらと思うかぶ事」とは何ですか。文章中の言葉を用いて書きなさい。

問五 ――部「父もまた子からの解放を喜んだ」のはなぜですか。

- 1 父としての立場を忘れて、役者として思う存分虎の行動を観察できるから
- 2 息子との慣れない外出に気疲れし、一人の時間をのんびりと過ごしたくなったから
- 3 見たくもないカバではなく自分の好きな虎だけをじっくり見物できるから
- 4 自分の仕事にむりやり息子を巻きこんでしまった罪悪感がうすれるから

問六 ――部「一種のあわれみとともに、みょうな愛情さえも生じて来た」について答えなさい。

- ①どのようなことに「一種のあわれみ」を感じたのですか。二十字以内で書きなさい。
- ②「みょうな愛情さえも生じて来た」のはなぜですか。文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

問七

——部「けれども眼前の虎は、彼にただ一度のあくびを見学させただけで、あとは林のように動かなかった。それでも彼は満足した」のはなぜですか。

- 1 大きなあくび一つで虎のどう猛な姿を十分表現することができるとわかり、思いがけない収かくを得たように感じられたから
- 2 頭の中で想像していた虎とちがって本物はさほど動かないという事実を目の当たりにし、役作りの方向が明確になったように思われたから
- 3 虎とひたすら向き合い、いっしゅんなりとも虎のあくびの中に野生の姿を見出したことで、虎の気持がわかったように感じられたから
- 4 虎を長時間見つめて、本物の強さは実は静けさの中にこそあるのだということに気づき、真の虎の恐ろしさを見たように思われたから

問八

——部「彼はそれを読んだ時、ちょっと一種の憤激に近いものを心に起こした。がしかしそれはすぐ消えて、あとには苦笑となり、次いで晴れやかな微笑へ推移した」とありますが、ここでの「憤激」「苦笑」「微笑」の説明としてふさわしいものをそれぞれ選びなさい。

- 1 虎の研究のために動物園に行ったことを見すかされたおどろき
- 2 自分の本領は虎を演じることでは発揮できるのだという自信
- 3 ささいなことを書きたてて読者の気をひく劇評家に対するあわれみ
- 4 自分の個人的な生活にまで口出しされてこみあげてきたくやしき
- 5 真けんに虎を演じようとする自分がばかにされたことに対する怒り
- 6 自分は虎を演じる程度の実力しかない役者だという自らへのあざけり

問九

——部「つづいて由井が登場した。川原が登場したが、そのたびにかかる大向こうかけ声は、深井のそれにおとるとも勝らなかった。深井は『それ見ろ』と思った」とありますが、「それ見ろ」とは前に「深井」が考えたことをうけています。その部分を五十字以内でぬき出し、最初と最後の八字を書きなさい。

問十

——部「深井は得意の絶頂から、たちまちにして恥のどん底に放りこまれた」のはなぜですか。

- 1 夢中になって虎を演じていた自分を息子が見ていたことを知り、息子に対してつねづね感じていた引け目を再び意識してしまったから
- 2 舞台の上で我を忘れて虎になりきっていたのに、いきなり現実の人間の世界に引きもどされてすっかり興ざめしてしまったから
- 3 観客のさかなかけ声に有頂天になっている自分が冷静な息子の目にはどのようなふうにとらえられているかと思つたから
- 4 自分の演技には満足していたが、人間以外の役を演じることが父親としての威厳を失うことだと初めて気づきうろたえたから

問十一 ———部「こうして虎と人間の子とは、暗い背景のかげでしばし泣き合った」とありますが、ここからどのようなことが読み取れますか。

- 1 動物園にいた虎が本来はするどい野生の力を備えながらも現実には暗いおりのなかでその力を発揮できないでいるように、深井と息子も暗く目立たない世界で生きていかねばならないこと
- 2 深井が本物の虎になりきってかっさいをあびたにもかかわらず、息子はせりふもない虎しか演じることのできない父にふがいなさを感じており、親子の間にいつまでもうまることのない深いみぞがあること
- 3 深井は動物園で見た本物の虎のように野性味あふれる虎を演じることができるとすぐれた動物役者だが、息子から見ればあくまでも尊敬できる一人の温かみのある父親でしかないということ
- 4 野生の活力をうばわれた動物園の虎に自分の姿を見たことで深井が虎になりきったように、息子もまた、見事に虎を演じきった父の姿を見て父と一体となり、二人の心が深く通じ合ったこと

問十二 「深井」はどんな人物ですか。三つ選びなさい。

- 1 冷こくである
- 2 物事に没頭しやすい
- 3 プライドが高い
- 4 おく病である
- 5 飽きやすい
- 6 感受性が強い

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

わたしは、「教科目」というものを中心にしてかんがえ、たとえば実験学級でおこなわれているような「総合」の必要を論じてきた。しかし、ふりかえってみると、われわれは、はじめから「教科目」というものをもっていったわけではなさそうである。わたしのかんがえでは、およそ「教科目」というのは、ひとつの歴史的な産物であって、こんなみょうちくりんなものにおつきあいしながら「教育」がおこなわれるようになったのは、ごくさいきんのことなのである。

日本でも西洋でも、ついこのあいだまでは「学問」とは、しよせん「学問」ということであり、その「学問」とは、要するに知識を探究する、ということ以外のなにものでもなかった。知識の領域は、ぼんやりとわかれていたけれども、ひとりの人間の内部では、さまざまな領域にわたっての好奇心がひとつに統合されていた。レオナルド・ダ・ヴィンチなどはその典型ともいうべき人物であって、かれはいっぽうでは、^{〔注1〕}揚水機だのハシゴ車だの飛行機の原型などをつくりながら、他方では人体解剖図をつくったり、流体の研究をしたりもした。そして、人生論も書いたし、あの「モナ・リザ」をもふくめて、たくさんのお名画ものこした。かれののこした論考は五千枚におよび、そのテーマは、万華鏡のごとく多岐にわたっているのである。

だからこそ、ダ・ヴィンチは、しばしば「天才」だ、といわれる。たしかにかれは天才であった。しかし、かれが例外的な頭脳であったことはひとめなければなるまいが、^{〔注2〕}だいたい、ルネッサンスのころまでの「知識人」というものは、おしなべていうならば、こうした存在ではなかったのだろうか。「物理学」だの「生物学」だの「機械工学」だのという、もろもろの「学」の名前は、当時の世界では知られていなかった。すくなくとも、こんちのような意味での厳密な境界線をもってはいなかった。境界線があったとしても、いろんな知的探求の作業はたがいにより合しあい、ひとりの人間の内部で統合されていた。

ギリシャ時代には、たくさんの思想家がいた。たとえば、ピタゴラスのように、幾何学の定理を発見した人もいたし、アルキメデスのように、物理学の探求をした人もいる。アリストテレスのような哲学者もいたし、ヒポクラテスのごとき医学者もいた。ギリシャの学問というのは、すばらしい学者たちによって形成されていたのである。しかし、こうした学者たちを、哲学者、物理学者、といったようなことばでひとりひとり、しめくくるのは、ひょっとすると、現代という時代に生きるわれわれのもののかんがえかたの投影にすぎないのかもしれない。ヒポクラテスは、たしかに、人間のからだの仕組みと、健康について論じたけれど、かれじしんがみずからを「医学」の「専門家」とかんがえていたかどうかは、わたしなどにいわせれば、すくなくから疑問だ。こんにちのことばでいえば、ギリシャの学者たちは、それぞれが、ひとりで多面的な知識人であった。ひとりの人間が、こんにちのことばでいえば、「物理学者」、「哲学者」、「数学者」、「政治学者」等々のたくさんの「専門」をかねそなえていた、というのがどうやら歴史的事実というものである。プラトンが、おれは「哲学者」なのだから、「専門」外のことは何も知らないよ、などと開きなおっていた、とはわたしには思えない。かれに「哲学者」という名前をあたえたのは、要するに、後世の人びとなのであった。

それとおなじことで、ダ・ヴィンチもまた、みずからをなにがしかの「専門」に閉じこめる、ということとはしていなかったのではないか。かれは、あらゆることに興味をもち、その興味のおもむくままに、あらゆることをしてみた、というだけのことなのである。「専門」という名の、ふしぎな制限をもたなかったことがあの、のびやかでゆう大なひとりの人物をつくったのだ。学問とか知識とかいうものは、じっさいは茫洋（注3）ぼうようとしていて、どこにも境界線なんか、ありはしない。もろもろの「学」というのは、いわば、ようかんを切りわけることくに、人間のがわが勝手にその茫洋たる世界を便宜上、わけてみたということにすぎないのであって、学問そのものが、はじめからバラバラに存在していたわけではないのだ。学問は、なんとか「学」という個別の「専門」学である

以前に、要するに学問であり、学者は、なんとか「学」者である以前に、要するに学者なのである。切りわけられたひとときのようなかんを「学問」だと思ひこみ、その「専門」にみずからを閉じこめてしまうのは、学者として、とんでもないカンちがいだ。そのカンちがいを、学生たちが「専門バカ」という、ミもフタもないあらっぱいことばで批判するのも、けっしてまちがいではないのである。

学問といい、教育といい、そこで人間が目標とするのは、問五 的な人間像であろう。切りわけられたようかんだけにしか興味をもつことのない「専門バカ」をつくることは、教育の目標ではない。しかし、それでは、いったい、どうしたらいいのか。

わたしは、まず、こんにちの学問の世界での「専門」とか、その展開応用としての教育における「教科目」とかいったものが、はたしてこのままでよいのか、というところからかんがえてみたい。

（加藤秀俊『独学のすすめ』）

〈注1〉水をくみあげる機械。

〈注2〉一四一六世紀にかけて全ヨーロッパに広まった、学問・芸術・文化の復興・再生をめざす動き。

〈注3〉広広としてはてしないさま。

問一 部A・Bの言葉の意味としてふさわしいものを選びなさい。

A おしなべて

- 1 多少の推測をまじえて
- 2 他のものと比べて
- 3 全体にわたって同じように
- 4 ひとつひとつ確認して

B ミもフタもない

- 1 ひどくまちがっていて直しようがない
- 2 前後のつながりがなく意味がわからない
- 3 何が本質的なものなのかはっきりしない
- 4 あからさますぎて味わいもふくみもない

問二 この文章で筆者がいう「学問」とはどのような行為ですか。文章中の言葉を用いて、十字以内で書きなさい。

問三 部「ルネッサンスのころまでの『知識人』」とはどのような存在ですか。文章中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。

問四 部「現代という時代に生きるわれわれのもののかんがえかた」とありますが、それはどのような考え方ですか。自分の言葉で書きなさい。

問五 に入る最もふさわしい語句を本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問六 筆者がこの文章で主張していることを、四十字以内で書きなさい。

問七 あなたがこれまで学校で学んだ教科の中から二つ以上をあげ、それらをゆう合せるとどのようなことが学べると思うかを百八十字以内で自由に書きなさい。

〔三〕 次の各文が完成するように、文中の□にひらがな一字ずつを入れなさい。

- 1 あたかも雪が降ったかの□□□、桜の花びらがちりしっていた。
- 2 時間に厳しいAさんがよもやちこくしてくることなど□□□□□。
- 3 せまい家ですが、どうかおくつろぎ□□□□□。
- 4 この様子だと、今夜はおそらく雨が降る□□□□□。

〔四〕 次の 部1～5のカタカナの部分を書きなさい。また 部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- 1 旅のハテ
- 2 ユデンがみつかる
- 3 シチュウを建てる
- 4 シレイを下す
- 5 キリョウのよいむすめ
- 6 よくない風聞がある
- 7 空が白む
- 8 定石通りのやり方



□
□
□

--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--

1000